

2004 年度生態史プロジェクト報告書

北タイ班全体報告

北タイ班の活動

池谷和信（国立民族学博物館）

1 背景・目的

北タイ班の研究では、北タイの山地地域を対象にして、狩猟採集民と焼畑農耕民における資源利用の生態史の変容を把握することから、アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の一般モデルの構築に寄与することをねらいとした。

北タイには、アカ、リス、モン、ヤオ、ラフ、ムラブリなどの山地民がよく知られているが、先行研究の多いチェンマイ県やチェンライ県をさけてパヤオ県やナン県を調査地として、焼畑農耕民ヤオと狩猟採集民ムラブリを対象とした。また、地域生態史を把握するための時代的枠組みとして、山地民の自立性の高かったと推定される 1960 年代以前、山地民の変容期である 1970 年代から 1990 年代、そして 2000 年代の 3 つの期間に便宜的に分けて考えてみることにした。

2 平成 16 年度の活動

上述の目的のもとに、池谷と増野の 2 人は、ナン県のムラブリとパヤオ県のヤオ（ミエン）の現地調査を行った。その結果、池谷は、文献資料を渉猟することから、ムラブリとモンとの関係の歴史の変遷を展望している。ムラブリに関しては多くの探検記が出版されており、今後より詳細な記述と分析を加えることができるであろう。また、現地での古老からの聞き取り調査も緊急におこなう必要があり、ムラブリの歴史を正確に記録に残す作業が必要になると思われる。

その一方で、増野は、GPS による簡易測量と畑の利用歴に関わる聞き取り調査から、1960 年代から現在までの土地利用の歴史を復元している。そこでは、村の中心的生業である焼畑の持続、変容、消滅の過程が描かれており、その変化の背景になる要因が分析されている。その結果、ヤオの山村における土地利用の変遷、土地の利用権の変遷、森林局の政策と地域住民の対応過程が詳細に描かれている。

今後は、2 つの調査地を対象にしての地域生態史的比較が必要である。両者は、タイ北部の山地という類似の環境からなり、ラオス国境に近い位置特性を持っている。また、国立公園のような保護区の周辺に立地している。今後は、ヤオやムラブリのこの地域への移住史の復元から、彼らが山地や平地に暮らす近隣民族とどのように共生関係を築いてきたのか、その後の変容過程はどうであるのか、地域生態史的アプローチから把握する必要があるだろう。